

興福寺講堂跡の発掘調査

建造物研究室・平城宮跡発掘調査部

1972年8月7日より約2週間で、奈良市登大路町興福寺講堂跡の須弥壇附近を発掘調査した。文政2年(1819)仮再建の中金堂が破損し、その復興にそなえて、中金堂安置仏像(重文)を移坐する仏堂を講堂土壇上に建設する事前調査として寺からの依頼で実施した。

新設堂は旧薬師寺金堂(天文14年建立)の移築である。新設建物は遺跡の保存上旧講堂土壇に方1.5mのコンクリート版を置いて、柱下基礎とする方針のため、全面発掘をおこなわず土壇上にさらに高さ約60cmで遺存する旧須弥壇廻りだけを発掘し、他に基壇南面の一部のトレンチ調査と、残存礎石の実測をおこなった。須弥壇は、内陣後列柱の前面中央3間にあり、花崗岩壇上積の地覆と羽目石が両側面のみに遺存した。桁行13.3m、奥行は推定4.9mである。羽目石に格狭間の彫り込みがあり、全体に焼損している。この壇上積基壇を覆って両側に約80cm巾の亀腹状盛土があって、これも破損しており、須弥壇を拡張したことがわかる。その外装材の痕跡が不明確なのは木製であったか。羽目石の格狭間からみて残存基壇は建治3年(1279)焼失後、弘安8年(1285)再建のもので、それが嘉歴2年(1327)焼亡して元徳2年(1330)に再建される時に拡張土壇中に埋められたと推定される。講堂はその後享保2年(1717)に焼失し、以後再興されない。なお須弥壇周辺には凝灰岩の四半敷床面がかなりよく残るが、これは恐らく治承4年(1180)焼亡後、元暦元年(1184)再建時の床面であろう。基壇南縁のトレンチでは礎石心より3mの出で旧地覆抜取跡と巾約50cmの玉石敷雨落溝が検出された。雨落溝の直下は地山で創建以来のものかもしれない。礎石は安山岩製、44箇中27箇残存する。(坪井清足・鈴木嘉吉)

第1図 興福寺講堂跡